

舟帽子・眼当・手拭資料の分析

国立民族学博物館収蔵標本による(6)

山崎 光子

Analysis of *Hunabosi* and *Meate* and *Tenugui*
for Headgear: Specimens in the Museum of
Ethnology (6)

Mitsuko Yamazaki

はじめに

前報では、風呂敷状、帯状かぶりものに次いで、頭巾状かぶりものについて報告したが¹⁾、ここではやや特殊な防寒用かぶりもの舟帽子と、かぶりものにも用いられることの多い手拭、さらに、眼面を覆う眼当資料についての観察結果を報告する。その大半は渋沢敬三氏らによって集められた、かつてのアチック・ミュージアム収集資料である。

舟帽子の分類

研究方法

分析の方法は前報に準じて次のような項目とした。結果のデータは表1にまとめた。

- (1) 資料の情報：名称(呼称)、採集地、採集年代、など
- (2) 形状、寸法、仕立て方(写真、図)など
材料、染め色、柄、用布、厚さ、重さなど

舟帽子の分類

結果と考察

資料3-1 【品名】ふな帽子

【標本番号】17499 (衣類F-5-13)

新潟県南蒲原郡見附町大字稲名寺通の十島興一郎氏の寄贈になるもので、1935年10月9日に岩倉市郎氏によって三角帽子(標本番号17500)等と一緒に採集されたもの。

形状は図1、写真1にみられるように舟形をしているため舟帽子と呼ばれており、またタコボッチ等とも云われている。一般には紺色のものが多いが、本資料の色は珍しいえび茶色〔5RP3/6 (dark red purple)〕であるから女物だったかと思われる。素材は綿ネルであるが、よく使い込んでいるため毛羽立ちがとれて、厚手木綿のように見える。手にとると、ホコリのような繊維のくずがおちる。形は他の同形の資

料に比べて両端の部分の幅がやや広く、出来上り幅8cm程である。糸密度は起毛のためよくよみとれない。

裁ち方は、この資料は、広幅物からとったものであろう、端の一方は耳ではない。片面の中央にはぎがあり、頭頂部では中心線から5cmほどずれている。縫い方は右よりの紺糸1本で0.8cmの縫い代で、合わせ縫い〔10針目/10cm〕ののちふせ縫い〔11針目/10cm〕、耳でない部分は0.5cm幅で折り伏せ縫い〔11針目/10cm〕にしてある。布端は裁ち切りのままであるが、材質からみてほつれはほとんどない。用布は広幅布のため70cm位で足りるであろう。

資料3-2 【品名】頭巾

【標本番号】22954 (衣類F-3-6)

埼玉県児玉郡で収集されたもので現地名は(モオロクズキン)であり、他の情報はない。主に老人によってかぶられることから、この名がつけられたものであろう。

真綿でつくったこの形態の頭巾は今でも新潟県では入手できるが、この資料は真綿を裂織布のように太く糸につむいでから、緯糸として織りこんでいる。

経糸は細い左撚りの木綿糸が〔14本/cm〕の糸密度で入っており、緯糸の真綿糸は太さに基だ粗密があり、〔7~8本/cm〕が朱子織状に織られている。したがって手ざわりがやわらかく厚々と仕上がっている。特に裏側があたたかそうに起毛していたようである。よく使いこんであり今では糸がよれかたまった部分もあり、明るい藍染の色〔7.5B3/6 (dull blue)〕も、まだ模様になってみえたりしている。織ってから染めたものと思われる。

直線部分の布端は耳のまま、曲線部分は断ち切りのままで始末はしていないが、0.8cmの縫い代で、木綿糸でミシン縫いがしてあるため丈夫である。裏布は勿論

ない。用布は 200 cm 位と推定される。

資料 3-3 【品名】タコボッチ

〔標本番号〕 21390 (衣類 F-4-13)

この資料は地域は不明である。手が長いことと、形がタコに似ているのでタコボッチの名がつけられたものであろう²⁾。現地名も同じである。

前のモオロクズキンと似たような素材で、細い木綿の経糸に真綿を太くつむいで緯に織り込んであり、起毛させている。色は鮮やかな藍染めで、濃い青〔2.5 P B 3/8 (deep blue)〕(内側は染まっていない)で、あまり使用されていない。長さ 135 cm にも及ぶ大きな布がはぎ目なく使ってある。冬期に暖をとるためかぶったものであろう。

裁ち方は、裁ち目がないためたっぷりと 210 cm 程の布を用いたと思われる。布端部分は、いずれも耳になっていてかさばらず、かぶりやすい。頭部の曲線の部分は裁ち切りのままであるが、材質がフェルト化しているためほつれる様子はない。曲線部分は 0.5 cm ほどの縫い代に、右捻りの黒木綿糸 1 本どりで〔9 本/10 cm〕ほどで合わせ縫いがしてある。裁ち方推定図は図示した通りである。用布は 210 cm 位であろう。

資料 3-4 【品名】ホーカンムリ

〔標本番号〕 19409 (衣類 F-4-9)

三重県志摩郡和具町から 1937 年 7 月 12 日に A・M 同人によって採集されたもの。現地名ホーカンムリである。

紺地のふな帽子であるが、やや変形しており弧の部分の面積が広い。両端は 22 cm ほどが、細い紐状に縫われている。ゆったりとホーカンムリして後に紐を結んだものであろう。髪を大きく結んでもかぶれる大きさである。使用頻度は高いようで、汚れている。

素材は糸密度の細かい紺無地〔10 B 2/2 (bluish black)〕木綿で、頭部に浅黄〔2.5 P B 3/8 (pale blue)〕の裏布がついている。

裏布は幅 46 cm 角のはぎ布で、頭頂中央の弧の部分に表布と裏布が離れないように、表に小さい目を出して白糸でとじつけてあるが、裏布のはぎ目は中心からはずして厚みが重ならないよう配慮してある。裏布の布端の一方は表布にそろえて耳のまま右捻りの紺木綿糸 1 本で伏せ縫い、もう一方は切れたのだろうか、途中で裁ち切りのままになっている。

表布の弧の部分は右捻りの細い黒木綿糸で〔7 針目/10~12〕合わせ縫いの後、〔6 針目/10 cm〕でとじ縫いしてある。よくかぶったらしく、裏側の糸は黒色であるが表の特に頭頂部の縫い糸の色はほとんどさめて白色である。表布の直線部分は一方は耳のままであ

るが、一方(おそらく前の方)は耳の部分を折り返して伏せ縫いがしてある。用布は 225 cm 位と思われる。

資料 3-5 【品名】ナカユテ

〔標本番号〕 15734 (衣類 F-5-7)

1931 年 6 月、岩手県上閉伊群土淵で佐々木喜善氏の採集によるもの。現地名も同じで、備考欄に老婦人の被り物とある。標本番号 15735 のナカユテも一緒に採集されているが、これは現地名がナガユテで備考欄にピンヅメとあり、13.5 cm 幅、130 cm の細長い帯状の布である。

形状は、これまでのふな帽子、モオロクズキン、タコボッチ、ホーカンムリと同様で、弓状の布を 2 枚合わせて縫ってあるが、弧の部分がややせまく高く採られており、しかし何よりも直線の部分まで縫い合わせて袋状にしてあるところが異なる。はじめかぶり物だったのを後に直線部分を縫い合わせたのではなく、はじめから袋状につくられていることがわかる。品名はナカユテであり、手拭いとして用いたことも考えられる。ふな帽子も頭にかぶるだけでなく首に巻くなど多様なかぶり方があり、あるいはその意味で共通の用い方もあるかもしれない。

色は黒であるが、手拭い様の薄手木綿を用いてあるため柔らかく、手拭としての役も果たせるが、両脇の紐の部分に絞った跡があることから、縛って用いたものかとも思われる。かなりよく使い古されている。

素材は平織り木綿。糸密度は経〔26 本/cm〕緯〔22 本/cm〕である。細い糸を用いた量産品で、色も合成染料で染めた灰色〔N 2 (grayish black)〕の無地である。

縫い方は、直線部分の両端を縫い残して縫い代 1 cm ほどの袋状に縫ってある。布を中表にして裏側を出してから手の部分を粗くくけてある。一部とじつけ残がある。縫い方は丁寧であるが、おさえのとじ縫いがないため弧の曲線がとところところ角ばっている。手の端の角の始末も粗末で、縫製技術はあまりよくない。

裁ち方は、図 1 にみられるようにこれまでの資料 3-1 から 3-5 までの類似の形状の曲線裁ちの場合でも、資料 3-1 を除いては、中央にはぎ目を入れずたっぷりと用布を用いており、農村においても必ずしも経済性だけを重視して衣生活が営まれていたのではないことがわかる。用尺は約 200 cm である。

資料 3-6 【品名】メスダレ

〔標本番号〕 16379 (衣類 F-5-10)

1933 年 10 月 1 日、岩手県岩手郡雫石町で採集されたもので、田中喜多美氏の採集、寄贈である。前々報の

資料1-4のシハンも同時採集である。

1938年の今和次郎氏の採訪記にもシハンや腹当てとあわせてこの顔当てが「馬の尾で織った布に縁づけしたものでペールをつけたような外見で、異色を発揮している特殊なもの」として報告されている³⁾。目的はあぶやぶよに刺されるのを防ぐためと書いてあるが、たな草のとり稲の穂が目に入って痛めないためとも書いている。

太い馬の尾の毛を用いてあるためシャリッとした手ざわりで、細かいふるいの目のようなかたさがある。今ではさわるとくずれおちるほどにぼろぼろになっているが、それにしても馬の毛でどのようにして作ったものであろうか、毛のつき目は全くない。

糸密度は経・緯とも〔10本/cm〕で平織り状、色は濃茶〔9 YR 3/3 (dark yellowish brown)〕である。

三辺を紺木綿〔3 P B 1.5/4 (dark blue)〕のへりとり布を1.5 cm幅にぐるりとまわし、粗いぐし縫いで止めつけてあるが、大半は退色して白茶けている。上部は1.5 cm幅、長さ85cmの紐をつけ頭部で結えるようになっている。

資料3-7 (品名)メスダレ

〔標本番号〕17026 (衣類 F-5-11)

1935年2月15日、新潟県中頸城郡桑取村大字皆口でA・M同人によって採集されたもので飯塚猪之助氏の寄贈になる。

前の資料3-6の馬の毛のメスダレと異り、丈の短かいからみ組織の織物で、これは遮光用具の雪目覆いであろう。うす手の布を通して陽光の強さを緩和し眼部を保護するサングラスと同じ機能を持つものとして天野武氏によって報告されている⁴⁾。新潟県にある津南町歴史民俗資料館の秋山郷および周辺地域の山村生産用具(国指定重要民俗文化財)の中にも数点これと同種のものが見られる。

素材は黒色〔N 1 (black)〕の絹布で経糸だけが2本ずつ振られて織られている。糸密度は経〔24本/cm〕、緯〔20本/cm〕である。

縫い方は、片側の耳をのぞいて裾側は1 cm、脇は0.5 cmに簡単に伏せ縫い〔10本/10cm〕をし、上方に黒と白の絹の変わり朱子織りの紐が1.7 cm幅でついている。しかしよく使い込んだためメスダレの上部以外はすりきれてしまい、褐変した白い丈夫な綾織りの紐がミシ

表1. 船帽子状(O), 眼当て状(★)かぶりものデータ一覧表

項目	資料名(現地名)		No		3-1		3-2		3-3		3-4		3-5		3-6		3-7		3-8	
	ふな帽子 (ふな帽子)	頭巾 (モオロクスキ)	タコポッチ (タコポッチ)	ホーカムリ	ナカユテ (ナカユテ)	メスダレ (メスダレ)	メスダレ (メスダレ)	眼当て (眼当て)												
標本番号	17499	22954	21390	19409	15734	16379	17026	23156												
採集地	新潟・見附	埼玉・見玉		三重・和具	岩手・土濁	岩手・栗石	新潟・桑取	秋田・角館												
形状分類	船帽子状						眼当て状													
仕立て方	単	単	単	単(裏)	拾	単	単	単												
接ぎ布の枚数	1	1	1	1	1	1	1	1												
寸法	縦 cm	25	24	24	28	33.5	22	25	15											
	横 cm	133	130	135	148	127	22	10	15											
	重なるの枚数	2	2	2	2	2	1	1	1											
材質	綿ネル	羊毛	羊毛	木綿	綿	綿	馬の毛?	絹	生絹											
組織	平織	朱子織	平織	平織	平織	平織		からみ組織	からみ組織											
糸密度	経 本/cm	起毛している	14	起毛している	24	26	10	細かい	18											
	緯 本/cm		7~8		22	22	10		14											
厚さ	mm	0.63	2.2	2.3	1.05	0.6	0.53	0.29	0.17											
色柄	えび茶無地	青無地	濃い青無地	紺無地	灰黒無地	濃茶	黒	黒無地	黒無地											
縫い糸・縫い方	材質	木綿	綿	木綿	木綿	綿	木綿	木綿	木綿											
	撚り	S	ミシンぬい	S	S		S	S	S											
	色	紺		黒	黒		紺	黒	黒											
	本数	1		1	1	給仕立て	1	1	1											
	縫い代	cm	0.8	1	0.5	1.2	1.7	1	0.7											
縫い方	合わせふせ	合わせ	合わせ	合わせ	合わせ、とじ	へり縫い	伏せ縫い	折り縫い												
縫い目針目	cm	10 11		9	7 6	11	10	11												
布幅	cm	36	27	36	36	33.5														
推定用布	cm	70	200	210	225	200	16	26	20											
重さ	g	84	139	196	140	43	23	11	6											

ン縫いしてつけられている。

資料3-8 【品名】眼當て

〔標本番号〕23156 (衣類F-3-7)

秋田県仙北郡角館町で採集されたもの、現地名も同じであるが他の情報はない。

前の二者のメスダレに比べて形状はやや小ぶりである。材質は絹で生絹と思われる。精練してないため生地にはりがあり、よく透けて見える。

織り方はやはり前資料と同様からみ組織の織物で糸密度は経〔18本/cm〕、緯〔14本/cm〕、色は黒〔N2 (grayish black)〕であるが、布地が弱くなってところどころきれはじめている。紐は洋服地らしい茶色の濃淡の斜格子のプリント生地が用いてあり、重さの大半はこれによってしめられている。

縫いは、眼當の周辺に0.7cm幅の縫い代〔11針目/10cm〕で、折り縫い、紐の9.1cmは1~1.5cm幅に折り、上から〔8針目/10cm〕でぐし縫いがしてある。

資料3-9, 3-10 【品名】鉢巻手拭

〔標本番号〕14926, 14927 (衣類F-5-2)

両資料とも1928年、東京都宇新島で藤木喜久磨氏によって採集されたもので、資料1-9の頭当と同時採集である。品名に鉢巻とあるから頭に巻いた手拭であろう。

頭当は使い古してあったが、この二者はまったく使用されたあとがなく、青味黒〔10B2/2 (bluish black)〕の型染模様がくっきりと、白地の部分にまでつくほどに濃く染めつけられている。江馬務氏によると手拭の染め方には、型紙で摺り込む方法と、表裏とも板に張り糊置きして刷毛で染める、あるいは浸深する方法があるというので⁹⁾、これはあるいは前者の摺り込み染めかもしれない。

両者とも約30cm長さの型紙(渋紙)を用いているが、一見してつなぎ目がわからないような、見事な職人技で染められている。更に両者とも表と裏の両方から型おきされているから高度な技術による仕事である。

素材の平織りの白木綿布は、布幅、厚さとも両者でやや異なり同じ布ではないが、同じ紺屋ではほぼ同時に染められたものであろう。

資料3-11 【品名】手拭

〔標本番号〕14929 (衣類F-5-2)

資料3-12 【品名】手拭

〔標本番号〕21462 (衣類F-4-15)

資料3-11の手拭は1928年京都府で渋沢敬三氏の採集したもの、附票に大原女手拭とある。資料3-12は採集者、採集地の記載はないが、付箋に〔浅黄染、木

綿手拭「渋52」〕とあるので渋沢氏のコレクションかもしれない。両者とも一幅の軸かざりにでもしたいような見事な手拭である。

大原女の手拭は一般には瑠璃紺で両面に和歌のかかれたものとしてすでに有名であるが、資料3-11の手拭は、桜や井桁や小花などを斜線地文に散らした3種の型をくりかえし糊おきに染めた華麗な手拭である。一枚の型紙は19cm弱の長さで、両面型染であるが、細かい模様であるにもかかわらずほとんどずれがなく、高度で精緻な技術によっている。更に、糊おきしたあとに2.4cm径の顔料による赤い丸模様を各型ごとに一点ずつ配置よくおき、その上をさらに糊伏せしてから藍がめに入れて染めたものと思われる。異なる模様に共通の赤を入れることでデザイン効果をあげている。

色は紺色で〔10B2/2 (bluish black)〕藍染と思われる。丸い模様は弁柄であろうか、赤茶色〔7.5R4/8 (red brown)〕である。

若干のしみのあとはあるが、折りじわもなく、ほとんど使用されていないものと思われる。

資料3-12は前者とは趣きを変えた茶道具一式の図柄で、渋い中にも新春のはなやかさのある模様である。茶道用の風炉・釜に、羽ぼうき、火箸に梅の花がそえられている。

筒染ではなく型紙一種を用いて糊置きし、やはり両面型置きであるがややずれている。

素材が手織りらしい厚手の木綿のためかもしれない。地染の藍染にもややむらがある。技術的には高度でないが、雅味のある手拭である。色は明るい縹〔2.5PB3/8 (deep blue)〕の藍染で、手拭の中央部分がやや黄変しているが使用された様子はない。

資料3-13, 3-14, 3-15 【品名】手拭

〔標本番号〕15478, 15479, 15480 (衣類F-5-6)

この三資料も渋沢敬三氏の収集によるもので、1930年に東京都で収集されている。備考として〔日露戦争〕とある。

3本とも三井呉服店製で、例えば資料3-13にみられるように「明治38年3月10日、第拾四奉天占領記念」などのように戦勝を記念した手拭のようである。

ほぼ同じような白木綿の手拭地に、同様なデザインの図案である。布幅はやや異なり、それぞれ一反の布に、型をおいて注染して染め出したもの、合成染料(硫化染料か)の染である。染色はうすい青〔7.5B5/6 (dull grayish blue)〕一色で、素材は量産された薄手の手拭木綿地である。

なお資料3-15の文字は「第十回 奉天占領記念、

明治三十八年三月十日、三越呉服店製」とあり、また資料3-14は「時事新報、時事漫画、三井呉服店製」として敵の将軍の言葉入りで日本が戦争に勝つまでの様子が語られている。

資料3-16、17 (品名) 四半手拭〔シハン手拭〕
〔標本番号〕 16603、16604 (衣類F-5-10)

資料3-18 (品名) 手拭〔ヌイダシテヌグイ〕
〔標本番号〕 20144 (衣類F-4-9)

三資料とも鹿児島県大島郡十島村の採集である。四半手拭の方には1934年5月15日A・M同人の採集で「十島村口之島の日高タネ氏寄贈」とあり、かぶり物と附記されている。

いずれも見事に刺しゅうあるいはしぼり染めされた布で、単なる手拭ではなく、赤いひもなどもついているので、故事来歴のあるものであろうか、それらに関する記録は特に何もない。ふさに使っている刺しゅう糸がどれも同じで、ヌイダシもようも似ているからこの地に共通の模様であろう。あるいは、いずれも日高氏の作かもしれない。糸質や、技術が若干違う。

ヌイダシ手拭は、糸密度が、経〔20/cm〕、緯〔16/cm〕の白い布(今はよごれているが)に、紫〔7.5 P 3/8 (purple)〕と赤紫〔5 R P 4/8 (dull red purple)〕の右よりの細い紺糸で、ほとんど織り目を1本ずつひろいながら縫い出しているため裏表がない。ところどころにピンク〔5 R 7/8 (pink)〕の糸も入っており、精巧華麗なかざり手拭いである。模様は上下にあり中心から周囲に広がっており両端は断ち切

りのままで何色もの刺しゅう糸を集めたふさが、5か所ずつついていたらしい根跡がある。その他、下方には赤いひもをむすんだともあり、魔よけの意味もあったのであろうか。

四半手拭には、資料3-18の刺しゅうと同じ麻の葉に似たもようなどが、今度は藍でしぼり染めされている。その上に同じような色の糸で刺しゅうしてあるが、その糸は西洋刺しゅうの糸で、表だけ粗くもようを刺している。やはりふさが所々についており、赤いひもも同様に付けてある。三者はいずれも色もように共通性があった。

総括

本報告では船帽子、眼当、手拭という全く異なる3種の資料をとりあげた。

a. 船帽子(資料3-1, 2, 3, 4, 5)

1. 呼称はふな帽子、モオロクズキン、タコボッチ、ホーカムリなどで、形状やかぶった状態、着用者層などに由来しているが、ほかに山形県、秋田県ではテナガボッチなどとも呼ばれている。ナカユテはこの種のかぶりものの呼称ではない。

・採集地は前々報の図1にみられるように新潟、埼玉、三重などで、冬期の老人の防寒用かぶりものため地域差はあまりないようである。採集時期は昭和10年、12年などがある。

2. 形状、寸法等は図1や写真1にみられるように、弧の部分の形状や手の部分の長さや幅にやや違いが

表2. 手拭(●)データ一覧表

No.	3-9	3-10	3-11	3-12	3-13	3-14	3-15	3-16	3-17	3-18	
資料名(現地名)	鉢巻手拭	鉢巻手拭	手拭	手拭	手拭	手拭	手拭	四半手拭(シハン手拭)	四半手拭(シハン手拭)	手拭(ヌイダシテヌグイ)	
標本番号	14926	14927	14929	21462	15478	15479	15480	16603	16604	20144	
採集地	東京新島	東京新島	京都		東京	東京	東京	鹿児島十島	鹿児島十島	鹿児島十島	
仕立て方	単	単	単	単	単	単	単	単	単	単	
接ぎ布の枚数(幅)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
寸法	縦 cm	34	33	33.5	33	31.5	31	30.5	30	32	32
	横 cm	88	93	92	76	85	91	92.5	43	45	90
	重なるの枚数	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
材質	木綿	木綿	木綿	木綿	木綿	木綿	木綿	木綿	木綿	木綿	
組織	平織	平織	平織	平織	平織	平織	平織	平織	平織	平織	
糸密度	経 本/cm	25	21	27	20	18	18	18	20	20	20
	緯 本/cm	20	18	20	13	14	16	16	13	16	16
厚さ mm	0.42	0.56	0.41	0.45	0.44	0.44	0.46	0.62	0.42	0.45	
色柄	白地	白地	紺地	縹藍地	白地	白地	白地	紺地	紺地	白地	
織、染、柄等	型染	型染	型染	型染	注染	注染	注染	絞り染	絞り染	色刺しゅう	
重さ g	44	58	48	52	37	45	44	32	27	40	

あるが、ほとんど同じような長い手のついた半円形のかぶりもので、2枚重ねの直線の部分に頭部を入れてかぶり、手の部分を首にまわしてむすぶ。縦横の長さをグラフ上に示すと、前々報の図2にみられるように風呂敷状、帯状かぶりものに次いで幅広である。仕立て方は素材自体が厚手のため単仕立てであるが、裏布つきのものもある。

○材質は羊毛をつむいで緯糸に織りこんだものや綿ネル、木綿布で起毛させたものもあったが、真綿のみの、いわゆる綿ぼし状のものはなかった。色は一般的な紺系統であるが、えび茶色も一点あった。勿論すべて無地染である。

○裁ち方について注目すべきことは、ゆとりをもった裁ち方をしていることである。資料3-1のように中央に接ぎ目を入れたらわずかな用布で済ませることができるが、他はみな2mあまりの布を使っている。何枚か分の舟帽子をまとめて裁ち、仕立て上げて販売していたものかもしれない。厚さ、重さのデータは手つむぎ製品のため当然大きかった。

b. 眼當 (資料3-6, 7, 8)

1. 呼称はメスダレ、眼當であるが、用途からみると、種の穂先や虫さされなどから顔や目を守るための眼當と、遮光用具の雪目覆いとしての眼當にわかれる。採集地は地図にみられるように、新潟、秋田と降雪地域のもので、採集年も昭和8, 10年と古い。今日のサングラスと異なり、必要不可欠のものとして考え出された用具であることがわかる。

2. 形状や寸法は図1, 写真1, 表1などに示した通りである。眼面に布を垂らして頭部に紐でしばる形式で、垂布は透けてみえる必要があり、からみ組織の織物が使われているが、馬の尾の毛を用いたらしい岩手のメスダレは特に珍しい。色は黒、模様は勿論ない。前々報は図2の形態分類にみられるように縦・横の丈ともに小さく、用尺もきわめて少ない。重さもわずかであるが、紐の量が多いためはっきりしない。

c. 手拭 (資料3-9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18)

1. 名称は手拭、鉢巻手拭、シハン手拭、ヌイダシテヌグイ等である。手拭は文字からみると手を拭くものとなるが、実際の用途は頭にかぶったり鉢巻襟にしたり、肩に乗せたりするいろいろな用途のあることは柳田氏によって指摘されているところである⁹⁾。採集地はここでは東京、京都、鹿児島に限られたが、

当然、全国各地に在ったもので、その手拭の長さも多様であり、帯状、風呂敷状かぶりものにもなったりしたと思われる。採集時期は昭和3年、5年と古い。

2. 形状、寸法はいわゆる手拭の長さで、縦30cmあまり、横90cm前後であるが、シハン手拭は五尺手拭の四半分といわれ、横が45cmほどである。前々報の図2の縦横グラフ上にみられるように、シハン手拭は一般の手拭の半分の横幅上に位置している。

○素材は平織り木綿であるが、そこに附された模様や意匠構成にみるべきものがある。渋紙の型紙による摺り込み染、糊置き型染、畳産手拭の注染の他、手仕事によるこまかい絞り染めや刺しゅう等が手拭布帛の二次元的平面に華やかにくりひろげられており、他のかぶりものと異なり美的価値の高い資料となっている。今日では手拭は白地の注染が多いが、かつては藍染による紺地の多かったこともここからうかがえる。

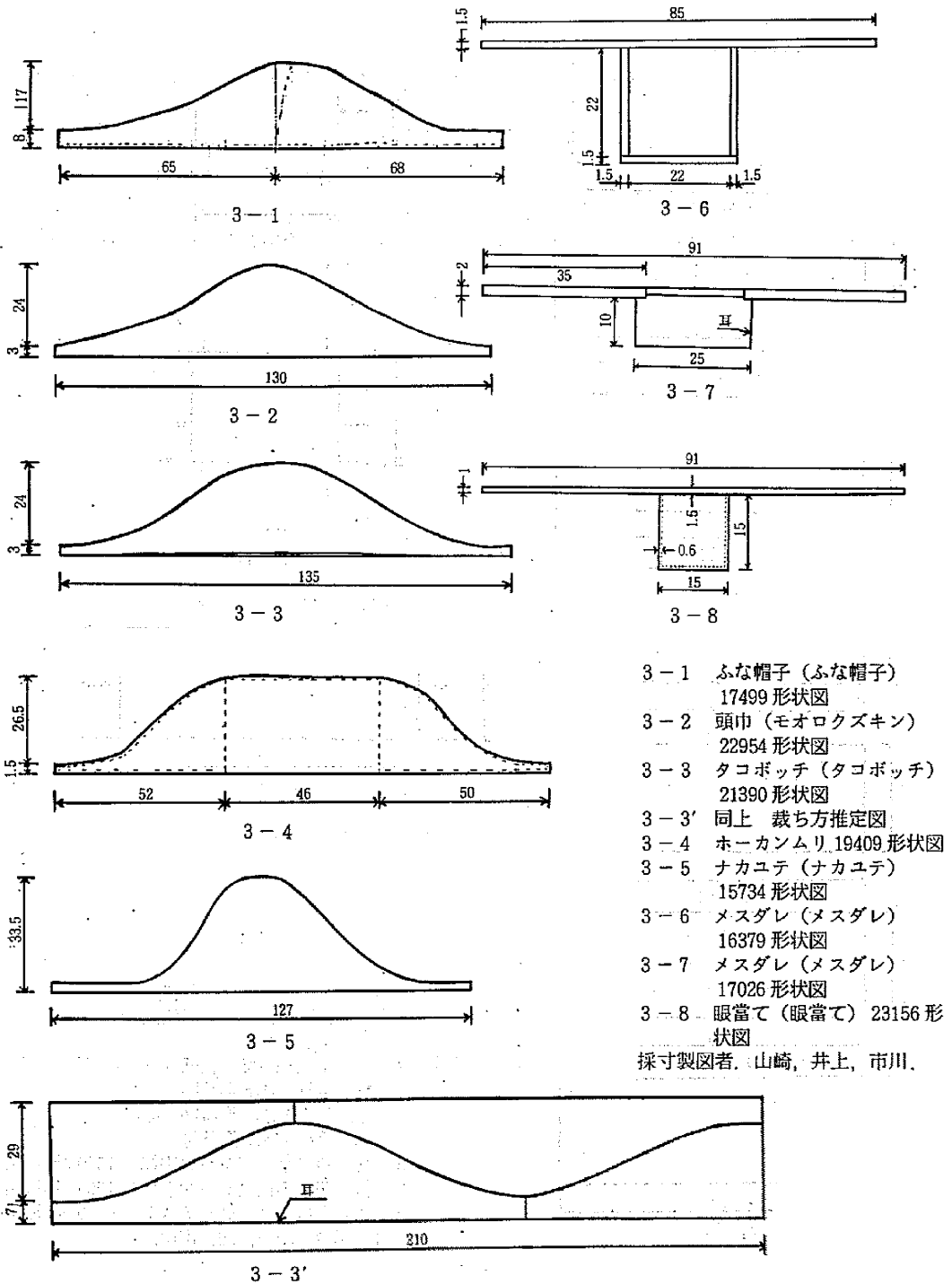
謝 辞

この報告は国立民族学博物館の共同研究「日本在来の労働衣服の比較研究」の成果の一部である。御指導頂きました共同研究の代表者の中村俊亀智教授(国立民族学博物館)、ならびに西村綏子教授(岡山大学)をはじめとする各共同研究員の方々、さらには資料の利用に御基力下さいました国立民族学博物館情報管理施設の方々に、心から御礼を申し上げます。

文 献

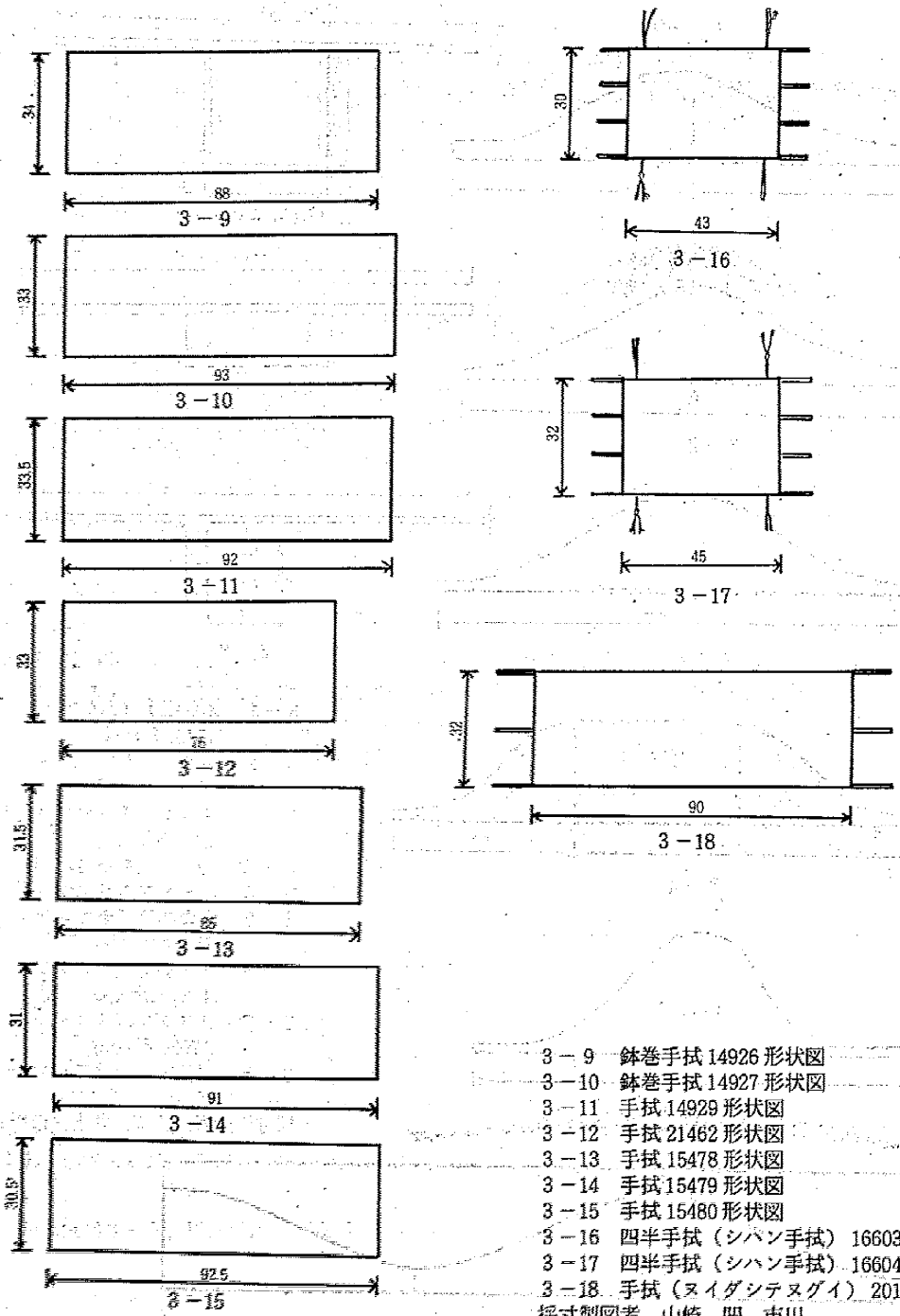
- 1) 山崎光子; 頭巾状かぶりもの資料の分析—国立民族学博物館収蔵標本による(5)。県立新潟女子短期大学研究紀要, No.22, 1985.
- 2) 守屋馨村; 覆面考料。213, 源流社, 1979.
- 3) 今和次郎; 岩手県御明神の農衣。(今和次郎集, No.9, 132, ドメス出版, 1972)
- 4) 天野式; 遮光用具ユキメオオイ。民具マンスリー, 7(11), 10, 1975.
- 5) 江馬務; 手拭の歴史。(江馬務著作集, 4, 440~441, 中央公論社, 1976.)
- 6) 柳田国男; 手拭沿革。(柳田国男集, 14, 381, 筑摩書房, 1969.)

(1985年1月16日受理)



- 3-1 ふな帽子 (ふな帽子) 17499 形状図
 3-2 頭巾 (モオロクズキン) 22954 形状図
 3-3 タコボッチ (タコボッチ) 21390 形状図
 3-3' 同上 裁ち方推定図
 3-4 ホーカンムリ 19409 形状図
 3-5 ナカユテ (ナカユテ) 15734 形状図
 3-6 メスダレ (メスダレ) 16379 形状図
 3-7 メスダレ (メスダレ) 17026 形状図
 3-8 眼当て (眼当て) 23156 形状図
 採寸製図者: 山崎, 井上, 市川.

図1



3-9 鉢巻手拭 14926 形状図
 3-10 鉢巻手拭 14927 形状図
 3-11 手拭 14929 形状図
 3-12 手拭 21462 形状図
 3-13 手拭 15478 形状図
 3-14 手拭 15479 形状図
 3-15 手拭 15480 形状図
 3-16 四半手拭 (シハン手拭) 16603 形状図
 3-17 四半手拭 (シハン手拭) 16604 形状図
 3-18 手拭 (ヌイダシテヌグイ) 20144 形状図
 採寸製図者 山崎, 関, 市川

図2



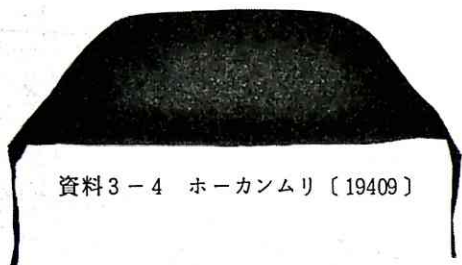
資料3-1 ふな帽子〔17499〕



資料3-2 モオロクズキン〔22954〕



資料3-3 タコボッチ〔21390〕



資料3-4 ホーカンムリ〔19409〕



資料3-5 ナカユテ〔15734〕



資料3-6
メスダレ
〔16379〕

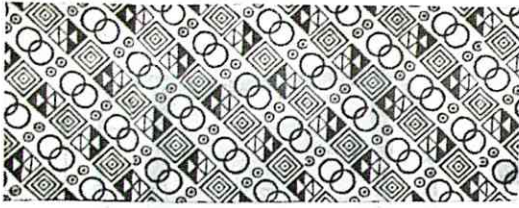


資料3-7
メスダレ
〔17026〕

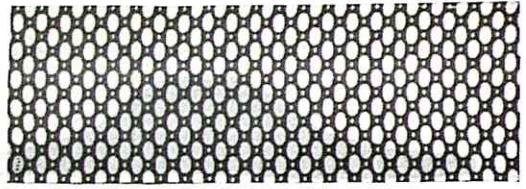


資料3-8
眼当て
〔23156〕

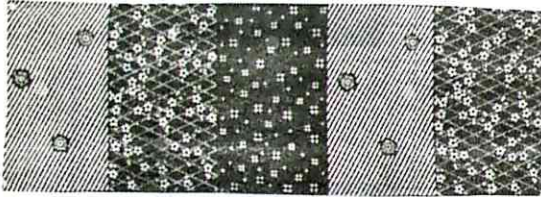
舟帽子
手拭資料の分析
〔1990〕



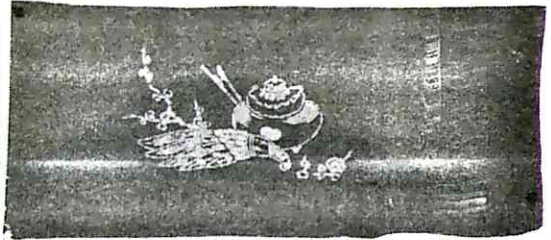
資料3-9 鉢巻手拭〔14926〕



資料3-10 鉢巻手拭〔14927〕



資料3-11 手拭〔14929〕



資料3-12 手拭〔21462〕



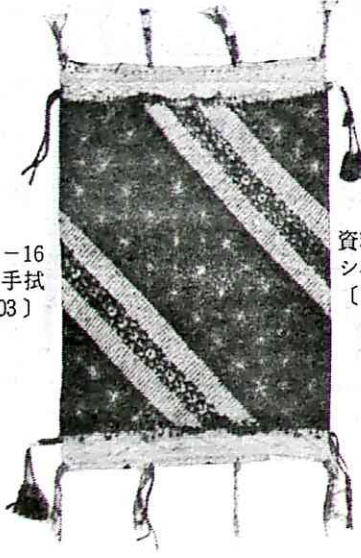
資料3-13 手拭〔15478〕



資料3-14 手拭〔15479〕



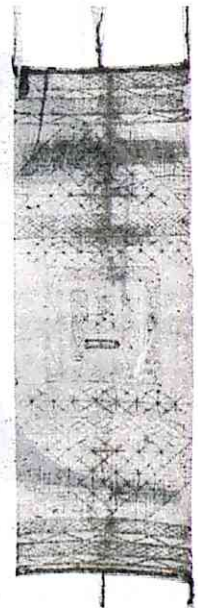
資料3-15 手拭〔15480〕



資料3-16
シハン手拭
〔16603〕



資料3-17
シハン手拭
〔16604〕



資料3-18
ヌイダシテヌグイ
〔20144〕

写真2